実践レポート

ミーティングによって他者を理解することから動き始める高校演劇の活動実践

香川県立観音寺第一高等学校
教 諭　　豊 嶋　了 子

1　はじめに

高校演劇は、高校生たちが考えたことや訴えたいことを表現する『発信力・表現力』と、作品創りを通してものづくりの喜びと達成感を仲間と分かち合い、集団全体の理解や士気を高めるための『コミュニケーション能力』が必要である。この２つが向上することで作品の質が上がり、舞台と観客が世界観を共有でき、大きな感動が生まれる。そのためにはある程度の専門知識が必要で、作品完成までに時間を要することからも、教員による指導やサポートが欠かせない。それでも最後は部員たちが自ら考え、自分たちの表現を実現し、観客に感動を与えられたと実感できることが大切である。創作活動を通して自ら課題を設定し、自ら解決しようとする姿勢を育み、他者の気持ちに寄り添い、社会のリーダーとして活躍できる人間になって欲しいという思いが、指導の中で年々強くなっていった。

2　実践の内容・方法

（１）現状把握

演劇には多様性があり、人数や性別に制限がない。在籍部員に応じて戯曲を設定するのだが、自分たちで改変可能で時代性を反映しやすい創作作品で挑む学校が多い。戯曲創作は時間と労力を費やすのだが、丸亀高校でも私が書いた本を練習の中でブラッシュアップするという形を採用していた。１テーマに対して考え方は様々で、複数の意見が出て前に進まないことも多々ある。また県大会は年に１度の県高校総合文化祭（総文祭）しかないため、総文祭で最後になる２年生と初めて総文祭を迎える１年生とでは作品に対する思いが異なる。全国大会は年度を跨ぐため、全国大会に推薦された年は新１年生を加えて出場するが、基礎と全国作品の稽古を両立させるというハードな事態が生じる。学年ごとの意識差や作品理解の溝をどう埋めるかも課題となる。更に、人間関係や勉強との両立に悩む者も存在する。役をめぐり役者がわだかまりを抱き、成績不振の理由を部活動にしてしまう者もいた。初めは小さな歪みであっても、言葉にせず我慢することで衝突が生まれてしまう。

以上から、活動する上で　①作品の解釈　②学年間での意識の違い　③個々の悩みの３つの課題と常に向き合い、解決しながら作品を創り上げることが必要となる。

（２）具体的な指導方法

練習時間の大半をミーティングに充てる。闇雲に「話し合って」と言っても結論の出ない散漫な内容に終始してしまうので、必ず何について話し合うか課題と目安の時間を設定するように指導している。それでも時間内に結論が出るとは限らないので、その場合は優先順位を考えてもらい、ミーティングを延長するかどうかを決めてもらう。例えば「時間までにこの人物の台詞の代案が決まらなかったが、明日は通し稽古の予定。このままミーティングを延長するか、明日もミーティングに充てる

か、どちらが良いか。」といった状況であれば、部員の予定、残りの稽古日数、体調など、様々な事情をくみとって部員たち自身が最善の策を講じる。その際、部活後にＳＮＳで話し合うという選択肢は考えない。顔の見えない話合いは時に独りよがりな意見をぶつけ合ってしまう。部活とそうでない時間のメリハリをつけることも大切だと指導している。顧問や引退した先輩たちが助言をする時もあるが、基本的には現役で活動する部員たちが納得することが大切だという共通認識の元で行うようにしている。

稽古を重ねるたびに台本の内容は大きく変わっていく

また、特定の個人を責めたりせず、部全体で良くなるという意識を忘れないことも念押しする。活動の中で自分たちは何を目標にしたらよいかについて必ず悩む。安易に「全国大会出場が目標」と設定するのではなく、なぜ全国大会に行きたいのか、自分たちはどう変わりたいのか、具体的なビジョンを持って目標設定するように伝え、定期的に確認するミーティングも行うよう指導している。

3　実践の成果

2014 年度の創作作品【用務員コンドウタケシ】は、応援団の引継式が舞台で、『伝統の可否』と『偏見』について問う内容である。県大会は３位で、ラッキー枠での四国大会推薦だったことを受け、四国大会までの約１か月で脚本や劇中の応援演舞を最初から全て見直すことになった。「実際にこの場面に遭遇したらどんな言葉を発するだろうか」という疑問から役者たちがエチュード（即興劇）を重ね、徹底的に議論し、展開を変えた。四国大会では最優秀賞（文部科学大臣賞）を獲得し、私が書いた戯曲で初めて全国大会に推薦された。2015 年夏の全国大会では、新１年生 10 名を迎えた。最初はいきなりの全国大会に戸惑っていた１年生も、ミーティングを通して先輩から作品への思いを聞くことで自分たちにできることを考えるようになり、演舞練習を徹底的に行い、舞台に迫力を加えた。また３年生の中には、大学受験と四国地区を背負っての全国大会のどちらもが自分の中であまりにも大きく、部活を続けるべきか思い悩む者も複数いた。そのため、８月まで続く部活動とどう向き合うかのミーティングを重ねた。全国大会は今しかできないことで、ここから逃げたら勉強からも逃げる時がきっと来る、だから逃げない、と全員で結論を出し、最後までモチベーションを保つことができた。全国大会は優秀賞（文化庁長官賞）を受賞した。部員たちから「教室の中であそこまで話し合う機会はない。とことん話合いを積んだからこその結果だ。」とミーテ

【用務員コンドウタケシ】の一幕

ィングの大切さを実感する声が聞こえた。

【フートボールの時間】の一幕

2017 年度の創作作品【フートボールの時間】は、明治・大正時代の丸亀高等女学校で実際に行われていた女子サッカーを題材に『フェミニズム』を描いた。女学生の着物や校舎のセットを全て手作りし、袴姿の女学生の躍動感、着物により醸し出される祝祭性と窮屈な慣習や旧制度の象徴が描かれていたことなどが評価され、県大会は２位、四国大会は最優秀賞（文部科学大臣賞）を受賞、全国大会に推薦された。ところが、作品を通して描きたいのは『女性が生き辛い世界』であるのに、演じる本人たちは日常で女性差別を感じたことがない、ということが課題として残っていた。四国大会での講評からもその点についての評価はなかった。2018 年の全国大会に向けて差別への意識改革が求められた。自校で起きた出来事の語り部となれるのは私たちだけで、ただの歴史の話で終わらせてはならない。その自覚は部員にあるものの、ミーティングを重ねても３年前と同じようには進まないことに私自身戸惑った。そこで、歴史に詳しい先生の元へ行き何度もお話を伺ったり、女子ワールドカップでヒジャブを巻いた女子選手が出場資格を取り消された話を紹介したりし、「自分が当事者だったらどんな気持ちになるか。」「なぜ差別はいけないことなのか。」というミーティングを幾度も重ねた。そのうちに、部員たちが自らサッカーのミニゲームを行い、サッカーを愛した女学生の気持ちに寄り添おうとするなど、工夫を重ね始めた。全国大会直前、女子や多浪生の点数が改ざんされた医学部入試の問題が噴出した時、部員たちが怒りを露わにした。脚本ミーティングで議論が更に活発化した。自他をリスペクトしフェアプレー精神を原則とするオリンピック・パラリンピックが日本で開催されることを踏まえ、差別を憂うだけの表現ではなく、差別の現状を社会に問う形も取り入れることになった。また新１年生も先輩が繰り広げる熱い話合いを通して感化され、共に差別について考え、追加の着物を手縫いで制作することで当時の女学生に思いを馳せようと努力し、発言も積極的にできていた。劇中の歌やダンスを練習のアップに取り入れ、３学年が一緒に行うよう上級生が積極的に声掛けをした。自分の役とは関係ないことをしているようでも、全員で取り組む姿勢が大切であるということを、部員たち自身が発見し、体現できるようになっていた。こうして活動が充実していくと、お互いを信頼し、学業や人間関係などで不満の声が上がることはなくなっていた。数か月にわたってミーティングを重ねたことで差別にまつわる前述の問いへの答えも見えたようだった。

全国大会では「今日性と普遍性を持った物語であり、この台本の誕生そのものが現代に祝福されている。」「差別され自由を抑圧されることの不条理が女学生の視点からリアルに表現されており、彼女たちの解放への願いは時代を超えて今の私たちに社会の有り様を問いかけている。」など、社会性を描けた点を評価され、審査員投票で満票を獲得して最優秀賞（文部科学大臣賞）を受賞した。部員たちからは「差別についての講義を受けるだけでなく、分からないことに向き合って芝居という形で表現したことで本質が分かった。」「全国大会で 100 点に仕上がったというより、練

習すればするほど 150 点にも 200 点にも伸びていく感覚だった。」「みんなで輪になってミーティングする時間がとても尊かった。」という感想が聞かれた。その直後、１・２年生は次作品への切り替えがうまくでき、直後に創作した作品も 2018 年の四国大会で１位となり、翌 2019 年の全国大会に推薦された。

4　普及させたい取組と期待される効果

寛容性や自己肯定感が高められる点でもミーティングは教育効果が高いと感じる。しかし、単に話し合えばよいわけではなく、集団の個性や課題の難しさに合わせて柔軟に課題解決の方法を工夫することも必要である。「以前うまくいったから次もこの方法で」では通用しないケースもある。生徒は解決に向けて糸口が見つかれば真摯に取り組むので、生徒を信頼し、任せて見届けることも指導者の大切な仕事である。

教室を借りて多くの意見を書いて整理していくことも

5　課題及び今後の取組の方向

2019 年度より観音寺第一高校で指導をしている。課題研究や兼部で多忙な部員が多く、丸亀高校の時より練習時間は少ない。それでも抱える悩みは同じで、指示待ちではなく主体的な活動にするためのミーティングを適宜行っている。現在は「誰もが喜ぶ作品を創り、結果として全国大会がついてこればよい。」という目標を設定できて、今後も丁寧なミーティングを重ね、生徒主体の充実した活動を展開できるようにサポートする。

観一生も輪になってミーティング。頑張っています！

全国大会に行きたい
たくさんの人に観てもらいたい
部活を充実させたい
勉強と両立したい
応援してもらいたい

**目標や問題点を引き出すための
ミーティング**

そうなるためには？

挨拶や掃除をきちんとする
問題を放置しない
個人プレーにならない
部活を言い訳にしない
自分たちで考えて行動する
まずは楽しむ

解決方法を導くためのミーティング

目標達成のために必要なことを自分たちで具体的に考え、とことん話し合うことで、
お互いを理解し、信頼しあい、活動を前進させていこう！

思いは言葉にすることで相手に伝わります。伝わると考え方も変わります。恐れず声に出してみよう！